

TEA FOR TWO 二人でお茶を

作 関根信一

【登場人物】

西野亮平
宮内健人

この劇はすべて、札幌市内のホテルの一室で行われる。

*

*

*

第一場

時…

一九八〇年、十一月のある日。

所…

札幌市内、それでも市の中心部からは少し離れたところにあるホテルの一室。壁や室内の調度には木材が多用されている、この物語が始まる八〇年代には、すでにやや古めかしい印象を与えるかもしれない、重厚なつくり。

高級感とは違う落ち着いた雰囲気、部屋には漂っている。それはちょうど、学生が受験勉強をここでしたら、さぞ集中できるだろうというかんじ。実際、北大の受験生はこのホテルによく宿泊しているはずである。むだなものは何もないシンプルなつくりは、どこかそんな勉強部屋が自然ともっている若者のまっすぐさと飾り気のなさに通じるところがある。

部屋の調度は、やや大きめのベッドに、木でできた机と椅子。壁に埋め込まれたクローゼット。バスルームへ通じるドアと廊下に通じるドアがこの部屋にはあるのだが、舞台上には見えていなくてもいい。

ベッドサイドの小さなテーブルには、クリーム色のプッシュホンの電話が置いてある。この物語がたどる二十五年の歳月の間には、通信手段はほとんど変化していくが、この電話は最後の場面までかわることなく同じ位置にある。もっとも、その存在はほとんど小さくなっていくのだが。

電話同様、部屋の調度と室内装飾は何ひとつ変わらない。毎年訪れる受験生たちが、顔ぶれは変わるものの「若者である」ということには変わりがないように。

何一つ変わらない部屋の中で、二十五年の歳月を生きる二人の登場人物は、時間の波に洗われ晒されて、変化し続けていく。もっとも、彼ら自身は、その変化にはあまり気づいていない。
三階にあるこの部屋の窓からは、初雪でうっすらと白くなった山々が見えるかもしれない。どんどん開発が進む市内の風景とは別に、この景色も二十五年間変わらない。

舞台が明るくなると、ベッドで亮平と健人が眠っている。

亮平が目をさます。寝ぼけながら、ベッドサイドにおいた腕時計を手に取り驚く。となりで寝ている健人を見て、もっと驚く。

起こさないように、ゆっくりベッドから降りて、服を着始める。

床に脱ぎ散らかしたスーツをゆっくりと着始める。まずはシャツから。

続いて、立ったまま靴下をはこうとするが、うまくいかず、倒れてしまう。

大きな音がする。そして、とっても痛い。

健人が目を覚ます。

亮平 ……どうも。

健人 ……どうも。

亮平 ……ゆうべは。

健人 ……そんな、こっちこそ。

会話は終わってしまった。

亮平は、勇気を出して、話し始める。

亮平 さすがに冷えるね。冬の札幌は。あれ、ヒーター入ってないのかな？ もう十一月
だつてのに。こっちじゃ普通？

健人 内地の人？

亮平 内地？

健人 あ、東京？

亮平 そうそう。

健人 東京の人なんだ。

亮平 ……。

また終わってしまった。

亮平 寒いな。

健人 服着たら？

亮平 あ、そうだね。

亮平、服を着始める。

健人 急いでるの？

亮平 モーニングコール頼んだのに、すっぱかされた。ヒーターのことと一緒に文句言うてやる。

亮平、電話に手を伸ばす。

健人 電話ならかかったよ。ずっと鳴ってたけど、あんた起きなかったんでないの。

亮平 ほんとに？

健人 それと、ヒーターも。夜中、自分で消してたよ。そのスイッチで。

亮平 (少し思い出す) 汗っかきなんだよ。なんていうか、こう……

健人 うん、すごかった。

亮平 ……

間

健人 急ぐんなら、僕も起きねばね。

亮平 別に急いでるわけじゃないよ。まだゆっくりしてて……

健人 シャワー借りていいですか？

亮平 どうぞ、どうぞ。

健人、床にちらばった服を手にして、洗面所に消える。

見送る亮平。

シャワーを浴びる音が聞こえてくる。

亮平、ベッドのそばに置いてあるゴミ箱を手取る。

中を見て、ため息をつく。

と電話が鳴る。あわてて受話器をとる亮平。

亮平 はい、三〇二号室ですけど。あの、モーニングコール……。あ、やっぱり……。

すみませんでした。もう起きましたんで。……いいです、朝食は。……いや、口に合わないとかそういうんじゃないやなくて、毎日、とつてもおいしくいただいでるんですけど、今朝は食欲ないんで。はい、はい。じゃあ。

受話器を置いて、ベッドに腰掛け考えこむ。

間

左の薬指にはめていた指輪がなくなっていることに気がつく。

驚愕！

あたりを探し回る。机の上、床のまわり、ベッドのまわり、下。見つからない。自分のバッグを手に取り、中を見てみる。どこにいつてしまったんだろう。

観客にはすぐにわかることだが、彼にはゆうべ一晩の記憶がない。頼りない記憶を頼りに、探すが見つからない。

と、離れたところにおいてある、見慣れないバッグが目に入る。健人のものだ。どうしようかと思うが、やはり他人のバッグを開けるわけにはいかない。

何度もためらうが、それでも、思い切って、手に取り、開けてみることにする。そこに、健人が出てくる。着替えを済ませている。この時代に流行ったチェックのネルシャツに学生服のズボン。

健人 (亮平を見て) 何してんのさ？

亮平 いや、なんていうか……

健人 まさか、あんたそういう人なの？ 置き引き？ 詐欺師？

亮平 違うよ。

健人 じゃあ、それは何さ？

亮平 だから、ちよつと捜し物を。

健人 捜し物？

亮平 いや、だから、まさかとは思ったんだけど。

健人 何、さがしてるのさ？

亮平 まあ、大したものじゃないんだけどね。

健人 大したもんでないもの探すのに、会ったばかりの他人のバッグ探すんだ。

亮平 もしかしたらと思っただよ。

健人 なんて、あんたのもんが、僕のバッグに入るわけ？ ちゃんと閉まってたでしようや。もし、その中に入ってるとしたら、それは僕が、わざと入れて、またしめたつてことでない？ つまり、あんたは、僕をそういうふう疑ったってわけなんだね。

亮平 だって、どこにもないんだって。

健人 何、なくしたの？

亮平 いや、だからほんとに大したもんじゃないんだって。

健人 話すすまないから、言ってみなつて。ほれ！

問

亮平 ……指輪。結婚指輪。

健人、あわてて探し出す。

健人 結婚指輪？ そんな知らないよ。ほら、ここには入ってない。(歩き回りながら)

やだな、ちゃんと探したの？

亮平 探したよ。

健人 洗面所は？

亮平 うん。

亮平、洗面所へダッシュするが、すぐに戻ってくる。

亮平 ない。

健人 そうだよな。あんた、あそこ行ってないと思うし。

亮平 ああ、どうしたんだろう？ どこに行っちゃったんだ。

亮平、部屋中をおろおると歩き回る。

亮平 これで三度目だよ。もしも、ばれたら、殺される。もしくは離婚。

健人 三度目？ こうやって男と泊まっては、そのたび指輪どつかやっちゃってるの？

亮平 そうじゃないよ、指輪なくすのが三度目。こんなことするのは、初めて。

健人 ……。

亮平 ねえ、僕、君に会ったとき、指輪してたかな？

健人 え？

亮平 頼む。思いだしてほしい。

健人 そんなの知らないよ、自分で思い出せばいいんでない？

亮平 それが思い出せないんだよ。

健人 は？

亮平 こんなこと言ったら気を悪くするかもしれないけど、正直に話すことにする。えーと、あなたは誰ですか？

健人 へ？

亮平 ごめん、どうやら、いろんなことしちゃったみたいだし、うまくごまかして話を続けようかと思っただけけど、やっぱり無理だった。君は誰なんだ？ なんでここにいるのかな？

問

健人 なんか前にもこういうことあったわ。

亮平 え？

健人 高校の同級生がうちに泊まりに来てなんとなくやってしまっただけで、朝起きたときに言われたの。しらばっくれて「やあ、ゆうべは酔っぱらってたから、何にもおぼえてないや」って。

亮平 僕は、ほんとに覚えてないんだ。

健人 ほんとうに？

亮平 だったら、こんなに動揺してないって。

健人 どこで会ったかも覚えてないの？

亮平 うん。どこ？

健人 SA（エスエー）ビルの前。

亮平 SAビル？

健人 知らないの？ ホモバーがいつぱい入ったビルでしょう。

亮平 いや、知ってるんだけど。そうか、あそこでか……

健人 あんた、べろべろに酔っぱらって寝っ転がってたんだよ。道ばたで。この時期の札幌甘く見ちゃダメだよ。酔っぱらって外で寝たら、すぐ凍死すつからね。浮浪者い
ないでしょう、大通り公園。東京とはわけが違うんだから。

亮平 僕、指輪してたかな？

健人 覚えてない。

亮平 それからどうしたの？

健人 無理矢理タクシーに乗せたんだけど、運転手さんに「あんたも乗ってくれ」って言
われて乗ったのさ。

亮平 いや、どうもありがとう。

健人 ほんとに覚えてないの？ だって、このホテルの名前はちゃんと行ってたよ。降
りるときにもオーバーの内ポケットから自分で財布出してたし。

亮平 その時、指輪は？

亮平、財布を出す仕草をしてみせる。

健人 わかんない。

亮平 それからどうしたの？

健人 帰ろうかと思ったんだけど、あんたゲロ吐いてしまって。ラーメン食べてたんだね。

亮平 それとジンギスカン。

健人 食べ過ぎたんでない？

亮平 いや、バーに飲みに行こうと思ったんだけど、なかなかふんぎりがつかなくて、飲
み屋じゃなくなって食べ物屋に行つては、ビールばかり飲んでる。

健人 じゃあ、バー行ってないの？ 帰りでないんだ。

亮平 うん。たぶんね。前まで行って、力つきたんだと思う。

健人 あれれ。

亮平 それから？

健人 玄関入って、フロントに寄ったら、かあさんが出てきて。「あらら」って。で、部
屋の鍵くれた。

亮平 ちよっと待った。じゃあ、ここのフロントのおばちゃんは、知ってるのか？ きみ
がここに泊まったことを？

健人 泊まったこと知ってるかどうかは知らないけど、来たことは知ってると思うよ。
亮平 うわ……。

健人 だいじょぶだって、なんだか普通だったよ。僕のこと「生徒さんですか？」って。
あんたのことも先生って呼んで。あんた何の先生なの？

亮平 数学。予備校の教師なんだよ。今年から冬期講習前の特別講座で東京から来ること
になって。

健人 ああ、それでなんだ。なるほどね。

亮平 ねえ、ずっと気になってたんだけど、君はなんで学生服着てるの？ まさか高校生
じゃないよね？

健人 大学生。応援団入ってるから。

亮平 ああ、そうなんだ。それから？

健人 エレベーターで三階まで来て、部屋入って帰ろうと思ったんだけど、あんた具合悪
そうだからさ、洗面所で水くんできて、あんた飲んで。

たしかに机の上にはガラスのコップがおいてある。

亮平、コップを手にとってみる。

亮平 そのとき指輪は？

健人 おぼえてない。

亮平 それから？

健人 ねえ、これだけ話しても、まだ思いださなの？

亮平 うん。

健人 なんか、だんだん腹がたってきた。

亮平 悪かったよ。で、それからどうしたの？

健人 水飲んだら、急に元気になっちゃって、すごい勢いでネクタイ外すと、あつという
間に服全部脱いでしまっって、びっくりしてる僕を抱きかかえて、ベッドにぽーんっ
て放り投げて、あとはもう獣のように荒々しく……

亮平 ぽーんっって？

健人 ぽーんっって。

亮平 ほんとに？

健人 ほんとに。

亮平 ……。

健人 嘘だよ。ほんとに覚えてないかどうか試したの。

亮平 そうだよね、いくら酔っぱらってるからって、それはありえない。

健人 あんた、僕が帰ろうとしたら、手にぎって放してくれなくて。どうしようかと思っ
ただけど、ま、いいかなって。

亮平 そのとき指輪は？

健人 ねえ、あんたも大変だったと思うけど、僕だって、大変だったんだよ。見ず知らず

の酔っぱらいをようやく部屋まで連れてきたと思ったら、腕捕まれて放されないんだから。

亮平 どっちの手？

健人 え？

亮平 (健人の腕をつかんでみる) こんなかんじかな？

健人 うん。そうだった。

亮平 じゃあ、ここで問題だ。思いだしてみよう。この指に指輪はあったかな？

健人 あんた、ほんとうに先生なんだね。

亮平 いいから、答える。どっち？

問

健人 もう、やめよ、こんなことするの。なんか、どんどん自分がみじめになる気がする。

亮平 そんな……

健人 だって、あんた何にも覚えてないんでしょ？ だったら、いいよ。思いだしてくれなくて。

健人、ベッドに座り込んでうつむいてしまう。

亮平 ごめん、傷つけるつもりはなかったんだ。ほんとうにごめん。

健人 こんなこと言いたくないけど、ただの遊びだったんだね。お酒のいきおいで。いいよ、そんなだったら、もう何も言ってくれなくて。

亮平 いや、だから、そういうつもりじゃなくて、なんていうか……。僕も覚えてないことは、ほんとに残念で、思い出せるものなら、なんとか思い出したいなと思って。

もちろん、指輪のこともそうだけど、君とのいろいろも。

健人 ……いいよ、無理しないで。

亮平 無理じゃない。ほんとにそう思ってる。

健人 ありがとね。でも、いいよ、もう行くわ。さよなら。

亮平、立ち上がって歩き出した健人を、思わず抱き留めてしまう。

無言のまま抱き合う二人。

なんとなく、二人ベッドに倒れ込んでしまう。

このまま昨夜の再現かと思ったときに、亮平が声を上げる。

亮平 あっ！

健人 どしたの？

亮平 ちょっとごめん。

亮平、枕カバーの中を探し出す。指輪が出てきた！

亮平 あった！！ あったよ。

健人 なんでもこんなところに？

亮平 思いだしたよ。こんなふうにしてるときに外したんだった。

健人 (うれしい) よかったね。見つかった。

亮平 うん。

間

亮平 ゆうべはどうも。

健人 そんなこちらこそ。

間

健人 なんで、外したの、わざわざ。僕ならなんも気にしないのに。あ、奥さんに悪い
か？ そうだよ、これって、浮気だもの。しかも、相手は男だし。指輪なくして
殺されるんなら、男と寝たことわかったら、どうなってしまふのかね？

亮平 そんなんじゃない。きみに悪いなあって思ったんだと思う。結婚指輪したまま、こ
んなことするなんて。あ、今、そう思ったんだよ。そうしたら、思いだした。
指輪外したことも、それまでのことも、そのあとのことも。

間

亮平 ……どうも。

健人 ……いや、なんも。気使ってくれたんだね。

亮平 そんなじゃないって。

健人 でも、そんなことするくらいなら、最初から外してればよかったのに。バーに飲み
に行くんなら、そのほうがずっといいんでないの？

亮平 まあ、そうなんだけど。それもなんだかおっかなくて。

健人 お守りがわり？

亮平 かもしれない。

健人 たしかにいるよね、左の薬指に指輪したまんま飲んでる親父さんたち。

亮平 ああ、そうなんだ。

健人 男の恋人からもらった指輪だったらいいのになあって、いつも思うんだよね。

間

健人 結婚して何年？
亮平 え？
健人 いいじゃない。話してくれたって。もう他人とは思えない。奥さんのこと。
亮平 はあ……
健人 いいから言ってみれって。何年？
亮平 二年。
健人 どこで知り合ったのさ？
亮平 大学のゼミのクラスメートでね。なんとなくつきあってるうちに、子供できちゃって。
健人 子供もいるの？
亮平 うん、一人。どうかした？
健人 ……なんも。（ため息）なんだ、あんたったら、結婚してるだけじゃなくって子供までいるホモなんだ。
亮平 ちよつと待った。僕はそんなもんじゃない。
健人 だって、奥さんも子供もいるんでしょ？
亮平 それはそうだけど。
健人 どこが違うのさ。
亮平 だから、その、今言った最後のところ……
健人 は？
亮平 僕は……じゃない。
健人 なんだって？
亮平 僕はホモじゃない。
健人 ちよつと待って。何、言うかな。あんなことしといて、よくそんなこと言えるね。
亮平 僕はホモじゃない。君とは違うんだ。
健人 僕とは違うってどういうことよ。
亮平 だって、そうじゃないか。
健人 違うよ、僕だって、ホモじゃない。
亮平 でも……
健人 いやなんだ。そうやって決めつけられるの。僕は、僕なわけでしょ？ そんなホモだとか、オカマだとかって、呼ばれたくない。やめてくれるかな。
亮平 でも、男の人が好きなんですよ？
健人 それはそうだけど。あんただって、そうでしょ？
亮平 それはそうだけど。
健人 じゃあ……
亮平 わかった。それじゃ、君はホモじゃないと仮定しよう。
健人 仮定？
亮平 そう。例えばの話。僕たちはゆうべ一緒に寝た。でも、君がホモじゃないとしたら、すなわち僕もホモじゃない。こういうことになる。これでいいだろ。

健人 いいのかな？

亮平 お互いに、ホモって言葉は口にしない。約束だ。これからは。

健人 これから？

亮平 そう。

健人 はい、先生。わかりました、先生。

亮平 じゃあ、そういうことで。

健人 ほんと先生だよ。高校の時の担任そっくりだわ。

亮平 あ、悪いんだけど、僕のこと先生って呼ぶのやめてくれるかな？

健人 だって、先生でしょや。名前知らないし。

亮平 西野亮平。

健人 (おどろいて) いいの、名前教えてしまつて。

亮平 だって、助けてもらったんだし、そのくらい。おかしいかな？

短い間

健人 僕は、健人っていうんだわ。宮内健人。君って呼ばないで健人って呼んでくれるとうれしいわ。

亮平 健人くん？

健人 いや、ただ呼び捨てで健人って。みんなそう呼んでるから。

亮平 わかったそうするよ。

短い間

健人 いつ帰るの、東京？

亮平 明日の朝。授業今日で終わるから。

健人 ……明後日から大雪だつていうから、よかったね。

亮平 うん。

間

健人 じゃあ、行くわ。

亮平 あ、そう。ちよつと待つて。

亮平、財布を取りだして、健人に一万円札を差し出す。

亮平 あの、これ。お礼って言っちゃなんなんだけど。

健人 いらないよ。そんなつもりでしたんでない。

亮平 じゃあ、タクシー代。

健人 地下鉄通ったから、ここからなら、すぐに帰れる。二〇〇円もあれば。
亮平 でも、お礼をいたたくて。
健人 それならもう聞いた。お金はいらない。
亮平 ……じゃあ、二〇〇円でも。
健人 しつこい人だねあんたも。
亮平 そう？

亮平、出した札を財布にしまいかける。

健人 それじゃ、お金のかわりに話をしてくれないかな？
亮平 え？

健人 いっつも思ってたんだよね。やってしまったあと、どうして、しゃべっちゃいけないのかなくて。たしかに、僕はおしゃべりなかもしれないけど、何か言いかけると、「いいから、だまつてろ」って、言われて。結局、相手が誰かもわかんないまま、
「それではね」って、別れて、それっきり。でも、先生はそうじゃないから。あ、亮平さんは。

亮平 そうかな？

健人 うん、名前も教えてくれたし。あんた変だよ。こんなの初めてだ。

亮平 僕は初めてだから。

健人 わかっている。そいじゃ、話そう。僕はもういいかげんしゃべった気がするから、あなたの話してよ。それが、その聖徳太子の代わり。

亮平 これあげるから勘弁してわけにはいかないのかな？

健人 だめ、だめ。

亮平 でも、何を話したらいいか？

健人 あんた先生なんでしょ？ しゃべるの得意なんでないの？

亮平 こんな格好で授業はしない。

健人 じゃ、服着る。僕はそのあいだにお茶でも入れようかな。

健人、ポットとカップを手取る。

健人 あれ、一個しかないね。どうしようか？ かあさんに言ってもってきてもらおう？

亮平 いや、それはよそう。僕なら、いいから。

健人 そう、じゃあ、僕、もうよ。

健人、一人でティーバッグのお茶を入れて、飲み始める。

健人 服着ないと。

亮平 ……。

亮平、服を着始める。

健人 着ながら話す。

亮平 ……そんな話すほどのことなんてないんだけど。おもしろくないよ。

健人 おもしろさとか、ものすごい話とか期待してないから。だいじょぶ。

亮平 そう？ じゃあ、何話していいかわからないから、質問してくれるかな。そしたら答えるから。いいよ。何でも聞いてくれて。

健人 初恋は？

亮平 初恋って……。小学校一年のときにクラスの子。席がとなりだったんだ。

健人 そうでなくて、男の人好きになった、最初のこと。

亮平 中学一年のときに数学の男の教師が大好きだった。

健人 六年間に何があったの？

亮平 ……わからない。何があったんだろう？ でも、そうなんだ。

健人 でも、結婚したってことは、女の人も好きなんだ。

亮平 女の人っていうか、彼女のことを好きだったんだ。別につきあってるつもりはなかったんだけど、いつの間にか、仲間内では恋人どうしってことになっちゃって。だったら、それでもいいかなって。

健人 男が好きなの？

亮平 うん。だって、いつかは結婚しなきゃいけないんだと思ってたし。

健人 じゃあ、次の質問。男の人と寝たことは？

亮平 だから、初めてだって。

健人 なんだか信じられないんですけど。

亮平 あんなんでも良かったのかな？

健人 ……良かったよ。

亮平 実を言うと、二年前に一度経験はしてるんだ。

健人 今、初めてって言わなかった？

亮平 寝たのは初めて。その時は立ったままだったから。

健人 立ったままでも寝たっていうんでないの？

亮平 そうなの？

健人 そうでしょ。で、誰と？

亮平 知らない人。映画館でとなりに座った人に誘われて……

健人 どんな人？

亮平 会社員。三〇過ぎくらいなの。

健人 何の映画？

亮平 「未知との遭遇」。

健人 「未知との遭遇」？

亮平 でも、こんなこととしていいんだろうかって、ホントに悩んで。それもあって、彼

女とつきあうことになってしまった。子供ができたのも、もし、女の人とで
きなかつたら、どうしようって、そう思ってた。

問

健人 ねえ、写真ある？

亮平 え？

健人 子供の写真。いつも持つてるんじゃないの？ がんばりの結果が見たい。

亮平 そんなんじゃない……

健人 持つてないの？

亮平 あるけど……

健人 じゃあ、見せて。

亮平、さっきの財布から写真を取り出して、見せる。

健人 めんこいね。男の子なんだ。

亮平 うん。

健人 これは何？

亮平 僕の足。

健人 いいよね、こうやって、父さんの足に腕からませて立ってるのって。映画雑誌で見
たことある。テイタム・オニールがライアン・オニールの足に腕からませて立って
るの。

亮平 そんなかつこよくないけど。

健人 僕の先輩はかつこいいよ。ちよつと似てるかも。

亮平 誰に？

健人 ライアン・オニールさん。

健人、胸ポケットから写真を出して見せる。

健人 どうぞ。

見てみる、亮平。

亮平 猫？

健人 へ？

亮平 だって、これ猫だし。

写真は、この頃はやった「なめ猫」。猫が学生服を着てポーズをとっている。

健人 (気がついて) あ、それは「なめ猫」。そうでなくて、こっち。

健人、写真を取り戻して、別のを渡す。

亮平 (受け取って見て) おお、いい男だねえ。ほんと似てるね、顎が割れてるところが。健人 でしょや？

亮平 先輩かあ、いいねえ。ありがとう。

亮平、写真を返す。

健人 高校のいつこ上なの。僕もおっかけて今の大学。

亮平 大変なんじゃない、応援団？

健人 なんで？

亮平 いや、こんなこと言っちゃなんだけど、応援団にいるようなタイプじゃないなと思ってる。

健人 ま、そうなんだけども。子供の頃からずっとオカマとかホモとか言っていていじめられてきたから、男っぽくなれたらいいなと思って。

亮平 なるほどね。

健人 でも、なんだか、マネージャーみたいになってしまってる。みんなのお弁当作ったりとか、かえって女っぽい仕事ばかり増えてしまってる、逆効果だったかも。

亮平 スポーツ刈りにしたらどうかかな？ 応援団らしく。

健人 ダメなんだよ。高校の頃、思い切って丸刈りにしたらあだ名ついたんだもの、「尼さん」って。

亮平 尼さんか……なるほどね。

健人 ……。

亮平 いや、ごめん。ひどい友達だな。

健人 いいよ、別に。ほんとにそうだったんだから。母親にも笑われたしね。

亮平 お母さん？

健人 うん、落ち込んで家帰ったら、「どうしたのさ」って。「尼さんって呼ばれた」って話したら、もうゲラゲラ笑って。「あんた親でないのかい？ そんなだから、父さんに逃げられるんだよ」って言ったたら、「お、その話すんのかい？」って大げんか。まあ、勝ったけど。

亮平 ねえ、だいじよぶなの、だまって泊まって？

健人 平気、夜中に電話しといたから、「友達のとこ泊まる」って。

亮平 今日、学校は？

健人 ない。

亮平 そうなんだ、じゃあ……

健人 いいんだ、もうやめてきたから？

亮平 え？

健人 やめてきたの、昨日、学校。

亮平 ほんとに？

健人 ほんとに。

亮平 どうして？

健人 行つててもしょうがないかなつて。

亮平 こういふ立場だから言う訳じゃないけど、もつたいたい。考え直した方がいいよ。

健人 だって、奨学金もらつて、なんとか入つたけど、やっぱり大変だし。

亮平 それだけの理由でやめるのはもつたいたいって。僕もずっと大学に残つて研究続け
たかつたんだけど、子供できちゃつたんで、あきらめて今の仕事始めなきゃならな
かつた。きつと後悔する。学校はやめちゃいけない。

健人 それつて自業自得なんでないの？

亮平 しょうがないよ、子供できちゃつたんだから。

健人 僕だつてしょうがないのさ。だって、先輩に彼女できてしまつて。ずっと一緒にい
たのに。なんか、この頃、僕のこと避けるようになって。

亮平 それでやめたの？ あきらめちゃうの？

健人 だって、先輩は僕のことなんて何とも思つてないんだから。いいんだ。

亮平 でも……

健人 いいんだつて。もう諦めたから。十五から五年間ずっと大好きだつたけど、もうお
しまい。昨日そう決めたのさ。

間

亮平、健人の肩に手を掛ける。

またしても抱き合つてしまう二人。

亮平、指輪を外そうとする。

健人 いいよ、そのまま。またなくされるとかなわない。

亮平、それでも指輪を外して、ベッドサイドのテーブルに置く。

キスする二人。

抱き合つて、ベッドに倒れ込む。

暗転

第二場

*

*

*

時…一九八五年、十一月のある日。

所…変わらない。

舞台が明るくなると、亮平がひとり。

前の場面から五年経って、亮平は少し落ち着きを見せている。仕事帰りのスーツ姿。

これからここで一杯やるうというかんじの準備がされている。

机の上には「樹氷」などの焼酎のボトルかサントリーの「だるま」。プラスチックのコップが2つ。スナック類が袋のまんま。

全然、大がかりでない、ほとんど十代の若者の飲み会の雰囲気。

そこへ、ドアをノックする音。

亮平 はい、はい。

亮平、ドアの方へいったん消える。

健人と二人ですぐに戻ってくる。

健人は、この時代らしい普段着。

健人 よかった。無事に着いて。夏、飛行機落ちたでしょ、日航機。だから、ちゃんと会

うまで心配で心配でドキドキしてた。

亮平 だいじょぶだつて。

健人 おめでとう、五周年。

亮平 元気そうだね。

健人 そっちこそ。少し太った？ 大台乗ったんだものね。

亮平 三十代は大台じゃない。

健人 大台でしょう。

亮平 じゃあ、四十代は何になるの？

健人 想像もできない。

亮平 こうして五年も毎年会ってるなんて信じられないな。

健人 うん。ほんとだよ。こんなに長いこと付き合ってるのって、友達でもそういないかも。

亮平 お母さん、元気。

健人 相変わらず。新しいパート始めて、元気にしてる。

亮平 そう。

健人 奥さんと拓也くんは？

亮平 元気だよ。

健人 拓也くん小学校でしよう？ 一年生。かわいくなつたんじゃない？
亮平 見る、写真。
健人 そうこなくちや。

亮平、写真を取り出しして見せる。

健人 前歯ないね。

亮平 近所の公園でキャッチボールしてたら、顔で受け止めちゃって。

健人 あらら。

亮平 でも、乳歯だからね。すぐ生えてくるだろうって言うてるんだけど、なかなか生えてこなくて、ちよつとあせつてるところ。

健人 ねえ、毎年こうやって拓也くんの写真見せてもらってるけど、なんで奥さんの写真は無いの？

亮平 しょうがないよ。だって、この写真撮ってるのが彼女なんだから。

健人 一枚も？

亮平 きらいなんだって、写真。

健人 そう。(部屋の支度をみて) ねえ、ねえ、何これ？

亮平 五周年だし、ちよつと飲もうかなと思つて。コーラで割つていいかな？

健人 うん。

亮平 乾杯しよう。とりあえず。

健人 うん。

亮平、机の上においてあつた焼酎を割つて、飲み物をつくる。

亮平 混ぜるもの、なにか……

健人 指、指！

二人、指で酒を混ぜる。

健人 一年ぶり。

亮平 五周年おめでとう。

二人、乾杯する。

健人 これおいしくないね。

亮平 ビールは飲まないようにしたんだ。

健人 三十の誓い？

亮平 うん。ちよつとお腹出てきてさ。

健人 それはいやみかい？

亮平 いや、人のことは別に……。好きだよ、そのお腹。

健人 いちいち言わんでいい。

二人、しばらく飲んでいる。

健人 ねえ、五年も経っていうのなんなんだけど、どうして毎年同じ部屋なの？

亮平 この母さんが気使ってくれてさ。あるとき、帰りしなに、挨拶してね。この机のことほめたんだよ。仕事しやすくもいい机ですねって。

健人 この机？

亮平 これ、あの人の息子さんが使ってた机なんだって。

健人 息子さんは？

亮平 東京で働いてるって。

健人 投げてしまえなかったんだね。

亮平 投げて？

健人 ああ、捨てられなかったんだね。

亮平 北大の受験生が、よく泊まるんだって。だから、ただのテーブルよりは、勉強机を置いてるんだって、どの部屋も。まあ、他の部屋は、もつと普通の今の机らしいんだけどね。

健人 僕こないだ。北大の受験のバイトやった。

亮平 どうな？

健人 合格発表の電報送るのさ。受かったら、「ホクトセイキタニカガヤク」、落ちたら「ホクトセイクモニカクレル」って。受験前に、門のところで、学生に声かけるんだけどね、そっけなく相手にしない学生には、わざと言ってやるの。「あ、そこすべりますよ」って。

亮平 いやがらせか？

健人 当然でしょ。

二人飲んでいる。

亮平 あれ、ケーキ焼いてくるって言ってなかったっけ？

健人 ごめん、ずっと忙しくて、今朝、大急ぎで作ろうとしたら、卵が一個足りなくてね。でも、ま、いいかと思って、作ってみたら、あんまり膨らまなくて、失敗してしまったの。

亮平 調理師の免許とったんでしょ？ 分量は正確につて、教わらなかったの？

健人 だから、何とかなるかと思ったんだってば。

亮平 ほんと適当なんだから。

健人 挑戦者って言ってくれる？

亮平 卵が足りない分、全体の量を少なくすればよかったのに。
健人 え？

亮平 だから、足りないところに合わせて全体の量を減らせば、少し小さくなるけど、ちゃんとできたんじゃないの？

健人 考えつかなかった。さすが、数学の先生。

亮平 数学は関係ないと思う。

健人 そういうわけで、ケーキはないんだけど、ジンギスカンどうかと思つて。バイト先で分けてもらつてきたの。

健人、持ってきた紙袋からジンギスカン用の卓上コンロとジンギスカン鍋を取り出す。

亮平 居酒屋のジンギスカン？

健人 ばかにならないよ。けつこういい肉なんだわ。ラムでなくて、マトンなんだけど、生肉だからね、全然くさくない。

亮平 ちよつと待つて。ここで焼くの？

健人 うん。

亮平 それはまずいだろう。すごい臭いこもるから。おばちゃんに怒られる。

健人 じゃあ、屋上にでも出る。

亮平 外は寒いだろう？

健人 あ、亮平さん東京だから、知らないと思つけど、札幌じゃ、みんなやつてるでしょ。

亮平 北大の人なんて「ジンパ」つって、年から年中やつてる。知らないの？

健人 それはお花見のときとかじゃないの？

亮平 一年中だつて。何か特別のときには、ジンギスカン。そういうもんなのさ。じゃ、行こう。

亮平 ああ、ちよつと待つて。

健人 何？

亮平 実を言うと……、ジンギスカンは苦手なんだ。五年前に一度、記憶なくしてから、食べられなくなつてしまつて。

健人 やだ、そうなの？

亮平 うん。

健人 じゃあ、これ食べて、その苦手を克服する。

亮平 ごめん、勘弁して。

健人 いつも、授業で言つてるんでないの？ 「苦手なところを克服するんだ」つて。

亮平 でも、ほんとうは思つてるんだよ。苦手なものは苦手だよつて。

健人 じゃあ、どうすんの？ これ？ あんた持つていく？ 東京におみやげ。明日だつたらだいたいよぶだと思つよ。

亮平 ありがとう。でも、遠慮しとく。

健人 そう、わかった。じゃあ、いいや、うちで母さんと食べるから。

亮平 そうしてくれるかな。

健人 ねえ、ジンギスカンだめなら、もう食べるものないし。じゃあ、外に出かけようよ。

亮平 外って？

健人 お腹すかない？

亮平 それはまあ……。でも、知り合いに会うかもしれないし。

健人 職場の同僚、生徒さんたち？

亮平 まあ、そんなところ。

健人 そうか、奥さんの実家、こっちなんだよね？

亮平 去年、ばったり会ったじゃないか。たまには外で待ち合わせしようって、ロビンソ

ンの前で待ってたのに、いつまで経っても来なくて。

健人 バイト上がれなくてさ。

亮平 そしたら、「何してんだ、こんなところで」って声かけられて。そこに健人来るか

ら。何で来るかな、あのタイミングで？

健人 だって、待ち合わせしたんだから、当然でしょ。誰だったのあいつ。教えてくれな

かったけど。すごいエラそうな酔っぱらい。

亮平 優子のおじさん。世話になってる予備校の重役。また、ススキノあたりで出くわす

とめんどくさい。

健人 どうめんどくさい？

亮平 なんて紹介したらいいか。

健人 友達って言ってくれればいいと思うよ、あるときみたいに。浮気してるわけじゃな

いんだから。って、浮気だけれども。女の人と二人で歩いてるわけじゃないんだか

ら別に困らないと思うんだけど。

亮平 それは、そうなんだけど……

健人 何？ 友達って紹介するのも心苦しいとか？

亮平 そうかもしれない。

健人 いいじゃない、友達なんだから。違うかな？

亮平 違うな。

問

健人 …… ねえ、あんた、こっちに友達っているの？ 僕のほかに。

亮平 え？

健人 こっちの人。

亮平 それはいいけど。だって、年に一度しか来ないし。

健人 じゃあ、バーに行こう。友達つくり。

亮平 ちよっと待ってよ。

健人 そうだ、そうしよう。決定！

亮平 いいよ、今日は二人でいたい。

健人 あんたさあ、毎年こつちくるわりには、ちつともバーとか行っていないんですよ？

亮平 うん。

健人 どうして？

亮平 だって、別に行きたいと思わないから。

健人 どうして？

亮平 だって、健人いるから。

健人 なんだか、すつごいぐつとくる台詞だけど、いいの、それで。

亮平 だって、バーって男探しに行くところなんでしょ？ だったら、別に必要ない。

健人 まあ、たしかに、それはそうだけど。友達いると楽しいよ。

亮平 そうかなあ。

健人 わかった。じゃあ、映画見に行こう。それならいいんでない？

亮平 映画？

健人 そう。「アナザー・カントリー」って、ゲイの映画。知らない。きれいな男の子

ばつが出てくるんだって、ルパートなんとかとか、コリンなんとかとかって、そりやもうきれいなんだから。

亮平 そういう映画、二人で行くのって、よくないんじゃない？

健人 ただの映画だって。今ならまだ最終回に間に合うから。

亮平 ……。

健人 飲み屋がだめなら、映画。どっちかに決める。

亮平 ……。

健人 一人では行かないからね。映画見て、どつかでご飯食べて。そんで帰ってこよう。

間

亮平 ……わかったよ。じゃあ、見に行けばいいんでしょ。

健人 じゃあ、支度しなくてはね。これ荷物だから、ここの母さんにあげてしまおう。

亮平 いつも、いろいろもらってるんだ。それがいい。

健人 いろいろって何もらってるの？

電話が鳴る。

亮平 (受話器をとって) はい、三〇二号室ですが。…あ、僕だけ。…うん、授業

終わって、帰ってきたところ。…どうしたの？ 宿題？ そんな、教えてやればいいじゃないか？ なんでわざわざ。あ、いいよ。じゃあ、かわって。…どうした拓也。引き算ができない？ お母さんにきいてごらん。お母さんだって、先生なんだから、教えてくれるよ。

亮平、健人を気にしながら、会話を続ける。
健人、初めのうちはおもしろがって聞いているが、だんだん飽きてくる。

亮平 怒らないから。いいんだよ、手を使って考えて。五引く三は、いくつかな？ ……
ああ、八じゃないな。五たす三が八だよ。リンゴが五つあるよね、そのうち三つを
食べたらいくつになる？ 三つ食べるんだよ。……わかった、じゃあ、まず一つ、
食べてみよう。いくつになる？ そう四つだね。じゃあ、もうひとつ食べてみよう。
もう食べられないか？

健人、洗面所へ消える。

亮平 ……じゃあ、お母さんがもう一つ食べる。お父さんは、まだいいから。拓也が食
べて、お母さんが食べたなら、あとはいくつかな？ そう三つだ。じゃあ、その次に、
お父さんがもう一つ食べた。あとはいくつ？ そうそう。じゃあ、みんなで三つの
リンゴを食べたら残りは何？ 落ち着いて考えてみよう。そう、二つだね。よくでき
た。

トイレの水を流す音。

亮平 じゃあ、五引く三はいくつかな？ ……だから、五足す三が八なんだよ。

健人、戻ってくる。

亮平 どうしようかな？ お母さんにリンゴ持ってきてもらいなさい。……じゃあ、買っ
てきてもらいなさい。……わかった、じゃあ、明日お父さん帰るから、その時に
買っていくから、それまで待って……。しょうがないんだよ、今日はお父さん、
仕事があるから。……だから、仕事は終わったんだけど、別の仕事があるんだよ。
そう、じゃあ、明日。うん、一緒に考えてあげるから。じゃあね。

電話を切る。

健人 苦手なんだね、算数。

亮平 優子も今年から、小学校で教えてるんだけどね、指で数えるのやめさせたいって
言ってるね。なかなかうまくいかないんだ。

健人 リンゴ買ってあげる。僕からのおみやげ。札幌のおじさんから。

亮平 いいよ、そんな気使わないで。

健人 じゃあ、行こうか。

健人、出かけようとする。
亮平、動こうとしない。

健人 どうしたの？

亮平 やっぱりよすわ。

健人 え？

亮平 ちよつと早く帰ってもいいかな？

健人 早く、どのくらい？

亮平 今、出れば、千歳発最終の羽田行きに間に合う。

健人 ……何言ってるの？ 今会ったばかりでもう帰るっていうの？

亮平 ほんとうにごめん。電話の向こうで、早く帰ってきて言って言ってるのに、僕は、こ

れから夜の街に繰り出そうとしてたんだ。そんな自分が許せない。

健人 映画とご飯のどが夜の街さ？ だから、帰るの？

亮平 そう。申し訳ない。じゃあ……

健人 最終で帰ったって、うちに着くのは夜中でしょ？ 拓也くん寝てるんじゃないの？

亮平 だったら、明日の始発で帰ったって同じだと思うよ。

健人 そういふ問題じゃないんだ。これは、僕の気持ちの問題なんだ。

亮平 ……まあ、そういうことだ。

亮平、荷物を取りに洗面所へ消える。

健人 どうしてそうやって自分だけいい子になろうとするのかな？ それじゃ、僕はどうなるの？

亮平、戻ってくる。

亮平 君と僕とは立場が違うんだよ。僕には妻も子供もいる。いつも好きなことしてるわけにはいかないんだ。また来年来るよ。

健人 そういふことじゃない。

亮平 わかってほしい。もし、このまんま、ここにいても、きつと落ち着かない。きつと後悔する。

健人 後悔？

亮平 うん。

健人 僕が後悔してないと思ってるの？

亮平 ……？

健人 それじゃ、僕も言わせてもらおうかな。ほんと言うと、僕、今日来るのどうしよう

かと思っただわ。会ったら、また、一晚一緒に過ごしたら、後悔するんじゃない

かっつて。そう思っつて。

亮平 ……。

健人 先輩とね、こないだ、バーでぼったり会っつて。びっくりして。なんだ、先輩もこっちの人だっつたんだっつて。で、思い切っつて、告白した。高校の頃から、ずっつと好きだっつたんですっつて。そしたら、なんだ、そんなの知っつてたよっつて。今、つきあっつてる人とかいないんですかっつて聞いたら、いないっつて言っつて、で……

亮平 付き合うことになっつた？

健人 ……わかんない。とりあえず、寝てはしまっつただけだ。

亮平 そうなんだ。よかっつたじゃない。

健人 うん。

問

亮平 じゃあ、先輩のそこ行けばいいじゃないか？

健人 なんでそういうこと言うかな？

亮平 ずっつと好きだっつたんだろ。夢がかなっつたんじゃないか、思いが通じたんじやないか。だっつたら、なんで僕なんかのところに……

健人 なんかっつて言うな！

亮平 そういっつう相手ができたんなら、僕は別にいいよ。

健人 別にいいっつてどういっつうこと？

亮平 だから、君に好きな人ができたんなら、僕は身をひくよ。

健人 そんなこと言っつてるんじゃない。僕は、はじめからあんたに奥さんも子供もいるの知っつてて、つきあっつてるんでしょ。どうして、僕にはそういう相手がいちやいけなの？ 好きな人くらいいいっつたっつていいじゃない。

亮平 だっつて、それは……

健人 ほんと言っつると、今日、亮平さんに会っつて、すっつごい老けたなとか、なんだか魅力的じゃないなっつて思えたら、もうやめにしてもいいのかなっつて思っつてた。一年ぶりに会っつて、そんなにうれしくなっつたら、おしまいにしようかと思っつた。でも、やっつぱり、一年ぶりに会っつると、すっつごいうれしんだもの。どうにもならない。先輩のことも好きだけだ、あんたのことも好きなんだもの。

亮平 ……。

健人 これっつてだめなのかな？ でも、しょうがないよ、好きなんだもの。

長い間

亮平、床にひざをっついて座る。

健人が、置いたジンスカン用のコンロを手に取る。

亮平 ジンスカン、食べてみようかな？

健人、亮平を見つめている。

暗転

*

*

*

第三場

時…一九九一年、十一月のある日。

所…変わらない。

ドアの開く音。部屋の電気が点く。
亮平が入ってくる。続いて、健人。

前の場面から六年。亮平は三十六歳。健人は、三十一歳になっている。

二人とも、ジーンズ姿。この頃、流行った「渋カジ」系である。三十過ぎて渋カジはないだろうという気もするが、とにかくそんな格好をしている。

亮平は、Gジャンの中に白いTシャツ。健人も同じようなGジャンにパーカーを着ている。

時刻は、夜のやや遅い時間。

すぐにわかるが、二人はバーで飲んで来た帰りである。

健人 もう、なんでタクシー拾わないのかな？ 札幌じゃワンメーターでも文句言わないよ。

東京とは違うって、自分でも言ってたでないの。はい。

健人、亮平にマフラーを渡す。

健人 落としたら拾えばいいでしょ。何、ムキになって歩いてるかな？

亮平 別についてこなくてもよかったのに。

健人 何か気に入らないことがあったの、あの店で？

亮平 気に入らないこと？

健人 初めのうちは、楽しそうにしゃべってたじゃないの。ゲイ雑誌、見たり。買っても家に帰る前に捨ててしまうから、落ち着いて読んだことないって。よかったでないの。

亮平 そういうことじゃない。

健人 何か、文句あるんなら言つてよ。そうやってふくれられてもわかんないから。

亮平 どうして、あそこに先輩がいるわけ？

健人 だから、さっきも言ったでしょ。偶然だって。

亮平 ほんとかな？

健人 ほんとだって。どうして疑うかな？

亮平 じゃあ、どうして、カウンターの中にいたんだ？

健人 知らない、あの店、忙しいと、客も中に入って手伝ったりするから。

亮平 ……。

健人 ほんとに偶然なんだって。やだな、焼き餅やいてんの？ やめてよ。だって、きつちり別れて、もう一年も経つんだよ。今はもうただの友達。そのへんの話は全部してるでしょ？

亮平 聞いてはいたけど、実際に会ったら、やっぱりショックだった。なんなんだあのかつこよきは！？

健人 そうかな？ 最近、ちよつと太ってきて、どんどん緩んできたんだよ。

亮平 あれで緩んでるんだったら、世の中はデブばかりだ。

健人 こつち見て言うな。

亮平 ほんとに偶然なのかな？

健人 何度も言ってるでしょ？ いくら僕だって、初めて、バーに一緒に行くのに、昔の男と十年越しの浮気の相手、引き合わせたりしないって。

亮平 いや、わからない。何度、ヒドイ目にあったことか。前だって、こつそり僕の授業聞きに来たじゃないか？

健人 だって、見てみたかったんだもん。バレてなかったでしょ？

亮平 三十過ぎて学生服着てたら、十分変な人なんだよ。バレルとかそういう問題以前に。

健人 僕より老けてる学生、最低三人はいたって、絶対に。

亮平 ほんとに偶然なんだな？

健人 ……ま、いるかもしれないかなとは思ってたんだけど。

亮平 ……。

健人 いいじゃない、もう何でもないんだから。会えてよかったじゃない。ね？

亮平 ……。

亮平、Gジャンを脱いで着替えようとする。

健人 脱ぐことない。

亮平 もういいよ。

健人 全然、おかしくないって。だって、みんな着てたでしょ？

亮平 それがおかしいんだって。なんでみんな同じようじゃなかったら。

健人 だって、流行ってるんだから。とつても似合うよ。白いTシャツ。

亮平 Tシャツじゃない。ただの下着。

健人 それを着こなすのがかつこいいんだって。

亮平 たしかにかつこよかったよ。先輩はね。なんだ、あれは。モデルか？

健人 時々そういうのもやってるみたい。

亮平 どうせ、僕は、根暗な中年ですよ。いい、これは、拓也にみんなやる。もう着ない。
健人 拓也くん中二でしょ？ もうそんなに大きいの？

亮平、服を脱ぎかけて、そのままベッドに腰を下ろしてしまう。

健人 どしたの？

亮平 なんだか、思いつきり疲れた。

亮平、ベッドの上に伸びてしまう。

健人 何してんの？ 寝たらだめだって。僕のうちにいくんでしょ、今晚は？

亮平 やっぱりやめる。

健人 どうしてよ？

亮平 わざわざ泊まりに行く理由がなくなっちゃったじゃないか？ 遅い時間に二人でホテルに帰ってくるのは、ここの母さんの手前、ちょっと気をつかうなあつて言ったら、じゃあ、うちに泊まればいいって。こんな時間に帰ってきちゃったんだから、もういいんじゃないか？

健人 だめだめ。母さん待ってるんだから、あんたに会うの。

亮平 悪いんだけど、よろしく言っておいてよ。

亮平、ベッドに横になるが、ふと何かに気づいて起きあがる。

亮平 どうして、待ってるんだ？ 僕のこと？

健人 え、初めて会うから。

亮平 遅くなったから、泊まりに行くんだろ？ なんで、夜遅く帰ってくる息子とその連れを、君の母さんは、寝ないで待ってるんだ？

健人 おいしいお寿司買ってきてあるって。近くにね、回転寿司なんだけど、けっこういいける店ができたんでそのの。

亮平 寿司はいい。なんで、こんな夜中に、君の母さんは、寿司を用意して、息子の連れを待ってるんだ？

健人 北海道の人間はもてなし好きだから。

亮平 何かある。何なんだ？ 何を企んでるんだ？

健人 そんな何も企んでなんか……

亮平、あらゆる手段を使って、健人に白状させる。

健人 わかった、言います。ごめんなさい。カミングアウトに付き合ってもらおうと思っ

て。

亮平 (手を止めて) カミングアウト？

健人 そう。僕はゲイだって告白すること、知らないの？

亮平 知ってるよ。そのくらい。

健人 一人よりは二人の方が心強いかなと思って。

亮平 何なんだその理屈は？

健人 男が好きだって告白しても、その好きな男がいなきゃ、説得力がないっていうか。

ほら、自分はゲイだって言ってるくせに、付き合ってる男がいなのって、なんだかよくわからないっていうか。

亮平 その理屈の方が、よくわからない。

健人 ああ、一人だとんだか心細い気がして。だから、亮平さんいるときに、せーのって言ってしまった方がいいって。

亮平 どうして、そう、いつもむちゃくちゃなんだ？

健人 お願い協力して。

亮平 どうして、僕が？先輩に頼めばいいじゃないか？

健人 だって、もう別れてるもん。昔の男より、今の男でしょ？

亮平 僕は断る。そんな、なんでわざわざカミングアウトなんて。たしかに、そういう人が増えてるのは知ってる。でも、健人がわざわざ……

健人 ねえ、ニュースになったの知らない？東京のゲイの人たちが、東京都を相手に訴えを起こしたの。青年の家の利用をゲイだってことを理由に断られたんだって。男同士で泊まるのは、青少年の育成によくない影響を与えるって。

亮平 それは知ってるけど……

健人 夜中にやってたテレビ見たって言ってたじゃない。ゲイやレズビアンの人たちが、カミングアウトして、ちゃんと顔出して、しゃべってたって。

亮平 だから、自分もカミングアウトするのか？自分はゲイだって。前はホモじゃないってあんなに言い張ってたのに。

健人 ホモっていうのは、ネガティブな言い方なんだよ。ゲイっていうのは、ゲイが自分で選んだ呼び方。大丈夫だよ。あのときみたいに、僕がゲイだから、亮平さんもゲイだなんて理屈言わないから。僕は僕、亮平さんは亮平さん。

亮平 母さんはそう思わないだろう？となりにいるんだから。何考えてるんだ？

健人 お願い、協力して。

亮平 大体、健人のことはお母さん知ってるんじゃないのか？

健人 一番の問題はそこ。僕もそう思ってたんだけど、どうやらそうじゃないみたいなんだよ。「このうちは、四人で住むには狭いかね？」なんて言い出して。

亮平 四人？

健人 僕と奥さんと子供と自分。

亮平 ほんとに？

健人 うん。僕も耳を疑った。「結婚するなら、今みたいなバイトぐらしでなくって、

ちゃんとした職につかねばね」なんて話にもなって。

亮平 なんだそうだったんだ。てつきり知ってるんだとばかり。

健人 でしょ？ だから、その誤解をはらすのは今しかないんだって。

亮平 どうして、今？ 僕がいるから？

健人 そうじゃなくて……あ、いいや。今、この状況で話すのはよくない。

亮平 よくない？ 何が？

健人 何でもない……

亮平、またあらゆる手段を使って、健人に白状させる。

健人 わかった、言います。僕、東京に行こうと思って。

亮平、びっくり。

亮平 東京に？

健人 そう。ごめん、黙ってて。でも、もし、言って、反対されたらどうしようと思って。

亮平 反対って……？

健人 する、やつぱり？

亮平 東京行くと、カミングアウトとどういう関係があるんだ？

健人 だって、もう帰ってこないかもしれないでしょ？ だったら、ちゃんと伝えておいた方がいいに決まってる。

亮平 帰ってこないって……？

健人 そういう可能性もあるでしょ？

亮平 なんで、そんな大事なことを勝手に決めるかな？

健人 じゃあ、相談したら、喜んでくれた？

亮平 ……それは、当たり前だろ。

健人 何、今の間は？

亮平 考える間だよ。考えて結論を出した。ちゃんと相談してくれたら、僕はうれしかったと思う。

健人 でも、今、全然喜んでるようには見えないのはどうして？

亮平 だから、それは……

健人 僕が東京に行った方が、絶対にラクなんじゃないの？ こんな小さな街でひと目気にするよりも、一千万人の東京の方がずっと自由になれるんでないかな？

亮平 ……

健人 もう十一年だよ。こうやって会うようになって。僕も三十一だ。これからのことだつて考えたい。

亮平 これからのことつて？

健人 ひと目を気にしないで二人で町を歩きたい。いつまでもかかってこない電話を待つ

だけじゃなくって、こっちからもかけたい。人にちゃんと宣言したい、僕たちはつきあってるんだって。そう、僕はゲイなんだよって。もつと、当たり前のことみたいに言いたい。僕はわがままかな？

短い間

健人 わかった。亮平さんに迷惑はかけない。でも、僕は決めたから。

亮平 ……思ったようにすればいいよ。僕が何言ったって、結局、自分の思う通りにしてきたんだから、これからだって。

健人 うちには来る？

亮平 ……今日はよすよ。もう遅いから。

健人 今日も、これからもだよね。

亮平 ……。

健人 じゃあ、電話しなくては。母さん待つてるから。

健人、電話をかける。

健人 もしもし、母さん？ 今日、連れていくって言った友達さ、ちょっと都合つかなくなってしまうって。うん、またにするって。うん、悪いね。寿司は適当に食べてて。うん、僕は、何時になるかわからない。うん。…話？ ああ、それはまた今度？別に急ぐ話じゃないから。…さっきまではそうだったんだけど、事情が変わったんだよ。どうって、なんていうか…。いいよ、電話じゃ言えない。…だから、また今度話すって言うてるべや。なんでそういうわかんないことばかり言うかね。……わかったよ、じゃあ、そんなに言うんなら、言ってしまうよ。あのね、僕はゲイなんだってばさ。

間

亮平はびっくり。

健人 いや、だから、ゲイ。何って、だから、それは、何て言うか…、母さん知らないのかい？ だって、いつも一緒にテレビ見てるでしょや。うん。…いや、だから、スキノで働いてたカルーセルさんとは、ちょっと違う。いや、同じなのか？…おすぎとピーコさんとは同じだと思う。…だから、僕が双子でないのは母さん知ってるでしょ。そうではなくて…。なんついたらいいんだろね。

健人、亮平に救いを求める。

亮平、違う方を見る。

健人 じゃ、こう言ったらわかるかな？ 男の人が好きなんだわ。女の人でなくって。そう。あ、わかった？ よかった。そういうこと。……もしもし、もしもし？ もしもし、もしもし？！

健人、また亮平を見る。

亮平、今度はさすがにちよつと気になる。健人の近くに寄ってみる。

健人、亮平の手を掴んで、放さない。

驚く亮平。

これ以降、電話を切るまで、健人は亮平の手をしっかりと握っている。

健人 なんて黙るのさ。………何よ、そうだと思つてたつて。……なんだ、そうだったのかい。だったら、もつと早くに言つておけばよかったな。うん、うん。だいじよぶだつて。ゲイとエイズは違うから。母さんのせいでないよ。女手一つで育ててくれたの感謝してるよ。だから、ごめんね。いや、だから、ゲイでごめんつてことではなくて。電話でこんな話してしまつて。

長い間

健人、受話器を置いて、うつむいている。

亮平、起きっぱなしの受話器を戻そうと手に取る。受話器を置こうとするが、ふとできごころで耳にあててしまう。

亮平 もしもし？ (電話は切れていなかった) わ、切れてない。……あ、あの、僕ですか？ 僕は、あの友達です。健人くんの。今、ここにいるのは、あの………どうしてでしょう？ ……はい。……はい。そんなこちらこそ。……あ、それじゃ………どうも。

亮平、電話を切る。

健人 なんだつて？

亮平 息子をよろしくお願いしますつて。

健人 ……。

問

亮平 東京、来るなら来ればいいよ、どうするかは、それから考えよう。

健人 ……。

亮平 いい母さんだな。

健人 そんなんでないつて。

間

亮平 なんていうか、僕で力になれることなら。その、なんていうか……

健人 東京には行かない。

亮平 え？

健人 言うだけ言って、どっか行ってしまうのは、やり逃げみたいなものね。やりにはよくないもの。僕はここにいるさ。あんたがいてもいなくても。

間

亮平 好きにしたらいい。

健人 話してしまっただし、せっかくだから、うちに寿司食べにこない？

亮平 じゃ、ごちそうになろうかな？

健人 だったら、電話しないと、一人で食べてしまうかもしれない。

亮平 じゃあ、すぐ電話。

健人、受話器を手取る。

亮平、出かける支度をしている。

亮平を見ている健人。一瞬目が合うが、すぐにそれぞれの仕事を始める。

暗転

*

*

*

第四場

時…一九九五年、十一月のある日。

所…変わらない。

亮平が、ベッドで寝ている。すぐにわかるが、亮平は普段寝間着として使っているジャージ姿。

亮平は、四十歳。やくたびれた印象だが、それは具合が悪いせいかもしれない。

間。

机の上に置かれたポケベルが鳴り出す。

鳴り終わっても亮平は起きない。

しばらく経って、ようやく起きあがり、ふらふらしながら、ポケベルを手に取り
てみる。

溜息をつくとき、電話に近づき、受話器を取り上げ、ダイヤルする。

亮平 もしもし。何？ ごめん、今、部屋で寝てるんだよ。風邪引いたみたいだ。拓也が
お腹の調子が悪いって言ってただろ？ あれ、食べ過ぎじゃなくて、風邪だった
んだよ。僕も、腹の具合悪い。だから、おじさんには会わなかった。まっすぐ帰っ
てきたから。……連絡はしといたから、だいじよぶ。じゃあ（切ろうとする）何？
……一人だよ。ほんとだつて。何言ってるんだ。十五年間同じホテルに泊まってる
んだよ。そんなに疑うんなら、このホテルに電話して聞いてみたらいい。そんな
誰も来たりしないって。ああ。まあ、授業のあと、昔の生徒と飲んで、部屋でも飲
んだことはあるけど。男だよ。何言ってるのかな？ ……熱があるんだよ。その声
は頭にひびく。じゃあね。……ほんとだよ。だから、聞いてみればいい。僕がど
れだけ、女つけのない生活を送ってるか。ちゃんと話してくれるから。うん。それ
から、ポケベルに「至急連絡を」って入れるのはやめてくれるかな？ そのたび
びつくりするから。そうだよ。そんな後ろめたいことはないけど。じゃあね。

亮平、電話を切る。

溜息。

間。

ノックの音。

亮平 開いてるよ。

ドアが開く音。

健人の声 こんにちは！

続いて登場した健人は、豪華な女装。ドラアグクイーン姿。派手なメイクに裾を
ひいたドレス。大きなウィッグに羽根飾りがいっぱい。
当たり前だが、亮平は、度肝を抜かれる。

健人 どう、元気にやってたかしら？

亮平 健人？

健人 はーい！

亮平 なんなんだ、その格好は？

健人 ドラアグクイーン。今晚、ショーやることになったんで？

亮平 ショー？ 何それ？

健人 何軒かの店が合同でイベントやりましようって、で、うちの店からは私が出演することになって。ちよつととうがたつてないでもないんだけどね。

亮平 フロントで母さんにあつた？

健人 会った会った。きれいですねえってほめられたよ。

亮平 どうするんだ。今、うちのと話して、札幌ではこれっぽっちも女つ気のないくらしをしてるって言ったばかりなのに。

健人 だいじょぶだって。これ女じゃないから。女装だから。だれもこれ見て女の人だとは思わないでしょ？

亮平 たしかにそうだけど。

健人 ねえ、そこが昔の僕とは違うところ。亮平さんに会ったばかりの僕は、女の人に見られるのがいやで男っぽくなるうとした。でも、ようやく今になって、このかつこうを受け入れられるようになったってわけ。これはすっごいおおきな事なわけ。僕にとつては。あんまり理解してもらえないかもしれないけど。

亮平 全く理解できないね。

健人 全然、平気。

亮平 なんで、ここにそんな格好で来るのかな？

健人 ショーの時間を考えると、今やっておかないと間に合わなくて、しょうがなかったの。

亮平 信じられない。

健人 あんたこそ何よ、そんなジャージ（語頭が高いアクセント）なんか着て？

亮平 ジャージ（同じく）？

健人 あ、ジャージ（平板なアクセント）。今晚は、出かける約束なんだから、早く着替える。

亮平 悪いんだけど、今日は出かけない。具合が悪いんだ。

健人 具合が悪いって、風邪？

亮平 わからない。腹の具合もよくないし、熱もあるみたいだし。

健人 熱？ 何度？

亮平 知らない。その格好見たから、四十度超えてるかも。

健人 だいじょぶなの？

亮平 だいじょぶじゃないから寝てる。どうして先に連絡してくれないかな。毎年毎年、びつくり箱じゃないんだから。一言連絡くれれば、こつちだって心の準備ができるのに。

健人 だって、ポケベルには連絡してほしくないって言うじゃない。

亮平 優子が見るかもしれないし。

健人 履歴消してよ。

亮平 苦手なんだよ、こういう機械。正直、却って不自由になった気がする。

健人 私が教えてあげてもいいわよ。

亮平 それから、そのしゃべり方、どうにかならないかな？

健人　しゃべり方？

亮平　頭にひびくんだよ。優子そっくりだ。

健人　なんだかうれしい！

亮平　よくいるよね、そういうかつこした口の悪いオカマって。

健人　オカマじゃないわ、ドラァグクイーン。

亮平　早く行きなよ。

健人　私のことなら気にしないで、病室に飾られた可憐な草花だと思ってくれれば。このふるくさい、勉強部屋みたいな部屋も少しはにぎやかになるでしょ。

亮平　あんまり病室向きじゃないね。

健人　ちよつとおしゃべりしてつていいかしら？

亮平　……どうぞ。

健人、腰を下ろして、話し始める。

健人　えーと、聞いている？

亮平　聞いているよ。

健人　えーと、みんな元気？

亮平　申し訳ない。僕は具合が悪いんだ。そつちの話はきくけど、しゃべるのはあとにさせてくれないか？

健人　ああ、ごめん。なんとなく、そのへんから始めた方がいいかなと思って。

亮平　優子も拓也も元気ですよ。

健人　そう。

問

亮平　先輩は？

健人　あれ、話すの？

亮平　そつちが黙ってるからだよ。どうなの？

健人　元気。こないだまで十勝に赴任してただけど、4月から戻ってきた。やっぱ札幌の方がいいねって。

亮平　そう。男関係は？

健人　相変わらず派手にやってるみたいなんだけど……

亮平　いいよね、モテモテだ。

亮平、咳こむ。

健人　だいじよぶ？

亮平　この頃、みように身体がだるくてさ。疲れやすいし、眠りも浅いし。

健人 あ、風邪流行ってるからね。
亮平 うん。

健人 そうだ、千歳空港新しくなって、札幌までくるのラクになったでしょ？

亮平 札幌駅も変わったね。町並みもどんどん変わってく。ここは相変わらずだけど。
健人 そうね。

間

健人 ちょっと話があるんだけど。

亮平 だから、話してていいって言ってる。

健人 落ち着いて聞いてくれるかな？ ちょっと大事な話なんだけど……

亮平 何？

健人 まあ、そんな大した話じゃないかもしれないんだけど……

亮平 どっちなんだよ？

健人 うーん……

亮平 だったら、あとにしよう。少しねむるから、帰ってきてからにして。もう、いいから、出かけてくれるかな。

健人 そう？ じゃあ、そうしようかな？

立ち上がる健人。

健人 やっぱり、だめだわ。これから出かけて帰ってくると、私、お酒飲んで、やけに元気になっちゃってしまったりするかもしれないから、今、話したいんだわ。

亮平 何なの？

健人 ……

亮平 お母さんが再婚した？

健人 まあね、今の彼とはまあ、うまくやってるんだけどね、この間も一緒にお酒飲んでって、これがまたおかしなオヤジさんでさあ……ってその話ではなくて。

亮平 何？

間

健人 もうやんなっちゃう。先輩がね、エイズの検査受けたら、陽性だったんだって。

亮平 へ？

健人 そうなの。

亮平 うわ……

健人 久し振りに呼び出されてあったら、そんなこと言われて、だから、お前も検査受けてみるって、言われて。で、私も検査受けに行ったのさ。

亮平 ……。
健人 そしたらね。そしたら…、私はだいじょぶだったの。

問

亮平 脅かさないですよ。本気で心配したじゃないか！

健人 ごめんね。結果出るまで二週間、ほんとにおっかなくて。亮平さんに連絡しようとおもったんだけど、どうしていいかわかんなくて。会ったら、言おうって。

亮平 よかったじゃない。

健人 うん。

亮平 話はそれでおしまい？

健人 ううん、まだ。

亮平 へ？

健人 だから、私はだいじょぶだったんだけど、亮平さんはどうかかんないと思って。

だから、検査受けて。僕はだいじょぶだったから、亮平さんも平気だとは思うんだけど、よくわかんなくて。だって、先輩と付き合いながら、亮平さんと会った時期もあつたわけだし。

亮平 でも、僕は先輩と直接、会ったりはしてないわけだし。

健人 わかんないじゃない。もしかしたら、ものすごくしぶといウイルスがいて、私の身体を通過してもまだ生きてて、亮平さんまで届いたかもしれないし。もしかしたら、私はものすごく丈夫で強くてなんともなかっただけで、ちょっと頼りない亮平さんには感染してしまつたかもしれないでしょ？

亮平 そういうもんなの？

健人 お願い検査受けて。調べたの。東京は、無料で匿名で検査受けられるところあるから。お願い。

亮平 僕ならだいじょぶだから。

健人 でも…

亮平 検査は受けた。僕はだいじょぶだったから。

問

健人 いつ？

健人 今年の春。

亮平 ……なんだそうだったの？

亮平 あんまりそういう話してないけど、気をつけた方がいいなと思って、僕も言おうと思つてたんだよ。コンドームは使つてるけど、時々いい加減だし。

健人 優子さんや拓也くんもだいじょぶってこと？

亮平 うん。

健人 よかった。

亮平 そんな日常生活ではうつらないって、そういうウイルスなんですよ。

健人 理屈ではわかってるんだけどね。なんだかごめんね。

亮平 あやまることないって。

健人 怒らないね。

亮平 そんな怒る理由なんてない。

健人 こんな格好してきたのも、なんだか元気でそんな気がしてき。なかなか言えないことも、思い切って言えそうな気がしてき。

亮平 その行き当たりバッタリな性格、ほんと変わらないよね。

健人 ごめんね。

亮平 だから、あやまることないって。どうせなおらないんだから。

健人 そんなことないって。あんた熱あるんですよ。早く寝ないと。

亮平 ……うん。

健人、亮平に布団をかけて、椅子に腰を下ろす。

健人 先輩、僕の前につきあつてた人に話したら、すっごい怒鳴られて。検査受けたら、その人も、陽性だったんだって。あんたのせいだって。僕も一緒に会ってたんだけど。先輩、一言も言い返さなくてき。どうしてさって言ったら、どっちからどっちなんて、そんなの関係ないんだって。でも、いろいろ考えると、感染のものになつてるのは、先輩じゃなくて、その人みたいなんだけどね。でも、何も言わないのさ。だまつてずっとただ怒られてた。

亮平 そう。

健人 それ見てたらね。なんだかほっとけなくなつてしまつて。もう一度やりなおせないかなつて、そう思つたの。また、つきあつてみようかなつて。

亮平 ……。

健人 ごめんね。熱ある人にこんな話。でも、話しておきたいなと思つて。

亮平 先輩には？

健人 言つた。

亮平 何だつて？

健人 同情ならいらんないって。

亮平 同情なの？

健人 わかんない。先輩と一緒にいたいって思う気持ちは、かわいそうっていうんじゃないって、何て言うか……。もつと違うもんなだよ。別にいいんだ。こっちを向いていてくれなくても。でも、思つたんだわ。僕は昔から、ちゃんと向き合つてるよりも、僕のことじゃない誰かのことを見る横顔見る方が好きなんだなつて。だから、いいよ寝てて。こういうの好きだから。

亮平 その格好でそばにいられると妙に落ち着かない。

健人 何もしないよ。こんな格好だから、となりに寝たりしないし。だから、いつもみたいに気使ってはじつこで寝なくていいからね。

亮平 そういうことじゃない。

健人 だから、いいよ、眠って。目閉じて聞いてて。

亮平 じゃあ、そうする。

亮平、目を閉じる。

健人 あの人の浮気だって、僕は別になんとも思わなかったんだよね。本当なら、怒っていいはずなのに。好きな人ができたって言われたとき、ああ、そうなんだって。不思議がられたんだもの。それでいいのかって。それが僕の好きになり方なんだなって、わかってきたんだよね。だから、これから、あの人がどうなるかわかんないけど、また付き合ってみようと思うんだ。

亮平 ……。

健人 小学校の時の校長先生がね、お習字のとっても得意な人で、お習字の時間のたびに漢字の成り立ちの話をいつもしてくれたの。それでね、人っていう字は、二人の間が支え合ってる姿を表してるんだよって話してくれたのずっと覚えてて。でも、あの字って支え合ってるんじゃないかって、もたれあってるんじゃないかって気がすごくて。一人じゃ倒れそうになるのを、もう一人がしょうがないなあって受け止めてるの。なんだかあんまり前向きじゃなくね。でも、そういうのがいいなって。ささえあうことはできないけど、もたれあうことはできるんじゃないかなって。なんだか、そう思うんだよね。

亮平 ……。

健人 だから、亮平さんもさ……

振り返ると、亮平はねむってしまっている。

健人、立ち上がって。部屋の電気を消す。

真っ暗な部屋。窓の外からの星明かりが、眠っている亮平と健人をうつすらと浮かび上がらせている。

亮平、大きく寝返りをうつ。ベッドの片方にスペースができた。

間

健人、ウィッグをとり、イヤリングを外す。くつを脱ぎ、背中のファスナーを降ろして、ドレスを脱ぎすてる。

そして、亮平のとなりに静かにすべりこむ。

眠りつづける亮平。

暗転

第五場

*

*

*

時…二〇〇〇年、十一月のある日。

所…変わらない

前の場面から五年後。

舞台が明るくなると、健人が一人でいる。

椅子に腰を下ろし、退屈そうなこなし。

健人は四〇歳。スーツ姿。といってもカジジュアルな着こなし。髪型も今風なテイ

ストで自由なふんいき。

携帯が鳴る。

出る健人。

健人

何？ ああ、ごめん。遅くなっちゃって。いったん、帰ろうと思ったんだけど、

ちよっと待ち合わせに失敗しちゃって。ていうか、待ちぼうけ。…だから、悪い

んだけど、あっちゃんに代わりに行ってもらって。話はもう通してあるから。

………新人の様子見てきてくれればいいから。派遣会社はね、こまかいケアが命

なの。うちみたいな駆け出しの小さいところは、そこが大事。じゃあ、よろしくね。

健人、携帯を切る。

ドアが開く音。

健人

もう、どこ行ってたの？ 母さんに言って、鍵もらっておいたよ。

亮平、登場する。亮平は四十五歳。スーツの上にトレンチコートを羽織っている。

いつもの姿。

わかりやすく酔っぱらっている。

亮平

あれ、もういたんだ。こんにちは。

健人

何、酔っぱらってるの？ やだな、酒臭い。

亮平

そんなことないでしょ。

健人

十分、あるってば。思い出すわ、二十年前。なんだか、なつかしい！ でも、すつ

ごい迷惑。ちよっと、何してんのよ？ 二十世紀最後のデートがなんでこんな始ま

り方？

亮平

いけませんか？

健人 知らないよ、またあのおときみたいに指輪なくしても。

健人、亮平の指に指輪がないことに気づく。

健人 ちょっと、やだ、指輪どうしたの？

亮平 あ！ ない！

健人 またなくしたの？ これで何個目？ 優子さんにまた怒られる。

亮平 怒られないよ。

健人 どうして？

亮平 もういないから。

健人 え？

亮平 離婚したんだ。

健人 は？

亮平 離婚したんだよ。

問

健人 嘘？

亮平 嘘じゃないもん！

健人 こら、ちょっと、ちゃんと話しなさいよ。何、いつ？

亮平 今年の五月。

健人 どうして連絡してくれないの？

亮平 びっくりさせようと思って。どうびっくりした？ いつもびっくりさせられてばか

りだから、たまには仕返してかんじかな？ へへへ！

健人 そんなびっくり比べしてどうすんの？ 何、ほんとうに？

亮平 ほんとですよ。

健人 そんな、どうして？

亮平 ばれちゃってたんだよね、僕のこと。

健人 僕の何？

亮平 僕がゲイだってこと。ホモだってこと。オカマだってこと。

亮平 どうして、あんたなんて身辺調査してもゲイのゲの字も出てこないんじゃないの？

亮平 携帯のメール。

健人 うわ。だから、履歴消すようにって言ってたじゃない。

亮平 機械は苦手なんだって。このひとは誰って聞かれてるうちに、話した。正直に。

健人 ごまかしてよ、うまく。

亮平 なんだか調べたりしてみたんだよ、札幌のおじさんあたりからもいろんな話が

いつてみたい。ちょっとこっちで羽を伸ばしすぎたかもしれない。

健人 そんな……

亮平 ま、熟年離婚ってやつだよ、今、流行ってる。

健人 流行になんか乗ったことないくせに。

亮平 これからは、お互いに自分の好きなように生きましようだつてさ。だから、好きなように生きちやうもんね。

健人 ちよつと。どうして、そういう話を、酔っぱらってする？ ほら、ちゃんとしなつて。

健人、亮平を椅子にちゃんと座らせる。

亮平 仕事もやめちゃった。

健人 へ？

亮平 予備校業界、不況だからね。少子化つてやつ。札幌の仕事も、結婚してればこそその縁故採用だからね。離婚と同時にはい、おしまい。さようなら。

亮平、クローゼットの中に消える。

健人 ちよつと待って。じゃあ、なんで来てるの、札幌？

亮平 (クローゼットから登場して) 会いたかったからに決まってるだろ。なんつって。どうびつくりした？

健人 だから、もうびつくり比べはやめていいから。何十年分もまとめてびつくりしてるから。

亮平 ふふふ、まだあるんだよね。

健人 何？

亮平 ちよつと、こつち来て。

健人 何？

亮平 いいから。

健人、げげんそうに亮平のそばによる。

亮平 手出して？

健人 え？ こう？

健人、両手をさし出す。

亮平 そうじゃなくて。

亮平、手を裏返すような手振り。

健人 何、こう？
亮平 そう、そう。

亮平、ポケットから指輪を出して、健人の左の薬指にはめる。

健人 何、これ？ 優子さんにつつかえされたやつ。おさがりなの？

亮平 違うよ。新品。わざわざ買いに行ったんだ。ぴったり？

健人 うん、ぴったり。

亮平 一緒になつてくれないかな？

健人 ……。

問

健人 何なの？ やめてよ、ふざけるの。

亮平 ふざけてない。一緒になつてくれないかな。

健人 やだな、酔ったいきおいでこういう話するの。

亮平 酔った勢いじゃなきゃできないんだよ、こんな話。先輩いるっていうのは、わかってる。でも、その上で、言ってる。

亮平、真顔になっている。

健人 ちよつと、何、酔っぱらつてないの？

亮平 酔っぱらつてた、でも、話してるうちに、どんどんさめてきた。実を言うと、今、膝も震えてる。真剣に考えてくれないかな？

問

健人 そんな真剣にって言われても。

亮平 考えてほしい。

健人 一緒になるってどういうことなの、具体的に？

亮平 東京にすればいい。一緒にくらそう。

健人 それはできない。会社始めたばかりだもの。

亮平 じゃあ、僕が札幌に来る。

健人 寒いのが苦手なんじゃないの？ こっちじゃ暮らせないっていつも言ってたくせに。

亮平 じゃあ、間をとって、仙台あたりっていうのは？

健人 結局、何も考えてないんじゃないの？

亮平 そんなことないって。どんなことでもする。僕はもう自由になつたんだ。これからの人生を考えたい。一緒に生きていきたいんだ。だめかな？ 虫が良すぎるかな？

返事は？ イエスって言うてほしい。

間

健人 ごめんなさい。

亮平 どうして？

健人 今のままでいいんじゃない？ どうして、今のままじゃだめ？

亮平 だから、一緒にいたいって……

健人 一年に一度だから、二十年も続けてこれた。毎日会ったら、一ヶ月で終わっちゃうかもしれないよ。

亮平 一年に一度なのに、二十年も続けて来れた。毎日会って、一ヶ月で終わるわけがない。

健人 ごめん。そういう理屈、わかんない。数学は苦手。

亮平 数学じゃない。

健人 いやなんだよ、つまらないことでダメになっちゃうのが……

亮平 どうして、決めつけるかな？ ダメになったとしてもいいじゃないか、またやりなおせば。先輩とはそうやって続いているんだろ？ どうして僕とはダメなんだ。何度も別れては、またより返しての繰り返し。僕が相談にのったことだってある。どうして、先輩はよくって、僕はだめなんだ。年に一度二十年間、おいしいところばかりをほしがった罰か？

健人 ごめん、でも、思うんだ。失ってしまわないためには、手に入れないのが一番なんだって。

亮平 ……

健人 だから、返すね。この指輪。

健人、指輪をはずそうとするが、外れない。

健人 あれ？ どうしたんだろう？

亮平 いいよ、無理して外さなくても。

健人 無理じゃない。(外れた) はい。

健人、指輪を亮平に差し出す。

亮平 (背を向けて) いらない。いいよ、持ってて。

健人 でも……

間

亮平 本当言うと、一人で生きてく自信がないんだ。こんなに一人つきりになったのって、気がついたら、初めてなんだよ。五年前に、僕が風邪引いて寝てる時、女装して来て、言ったよね。もたれあつて生きていきたいって。しょうがないなあつて思いながらつて。

健人 聞いてたの？

亮平 うん。思いだしたんだよ。今ごろになつてね。そんなふうになれたらいいなつて。思いついちゃつたんだよね。意気地なしの思いつきだ。

健人に背を向けて話している亮平。

指輪を手にしたまま、立っている健人。

亮平の話聞きながら、指輪を握りしめている。

亮平に向かって、一歩歩き出そうとしたとき、亮平が振り向く。

亮平 なんてね。冗談だよ。全部冗談。酒の勢いのジョークつてやつ。

健人 ……なに、それ？ ここまで全部がびっくりだつたつてわけ？

亮平 そうそう。

健人 なんだびっくりして損しちゃつた。

亮平 来年もまた来るから。二十一世紀になつても。

健人 ……うん、待ってる。ていうか、今年だつて、まだ会つたばかりじゃない。何言つてるの？

亮平 失わないためには手に入れないこと。たしかにそのとおりかもしれない。

健人 (明るく) でしょ？ はい、これ。

亮平 うん。

亮平、手を差し出す。

健人、手を伸ばし、亮平の手のひらに指輪を落とす。

亮平、指輪をポケットにしまう。

暗転

*

*

*

第六場

時…二〇〇五年、十一月のある日。

所…変わらない

前の場面から五年後。

舞台が明るくなると、亮平と健人が、客席に背を向けて二人で立っている。

亮平は五〇歳。セーターにジャケット。眼鏡をかけている。髪に白いものがちらほら混じっている。

健人は四五歳。カジュアルな服装。髪型も今風なテイストで自由なふんいき。しばらく立っている二人。

健人 変わらないね、この部屋。

亮平 うん。二十五年か。

健人 年取るはずだわ。

亮平 昔、四十なんて想像できないって言ったのに、もういくつ？

健人 二十七。

亮平 設定年齢じゃなく。

健人 知ってるのに聞かない。僕は四十五、あんたは五十。

亮平 初めて会ったのが二十五。倍の年月が経ったってわけだ。

健人 二十五年って、銀婚式ってことか。

亮平 ま、実際会った日数は、全部合わせてもまだ一ヶ月とちょっと。

健人 エッチの回数はどうじき七十かな？

亮平 数えてるの？

健人 日記につけてる。

亮平 ほんとに？

健人 うそ。日記なんかつけられるわけないでしょ、僕が。長いつきあいなんだから、そのくらいわかってよ。

亮平 まあ、そうだよね。

健人の携帯が鳴る。

健人 ごめんね。

健人、携帯に出る。

健人 何？今日は休みなんだから、電話してこないですよ。やっちゃんもいい年なんだから。そろそろ管理職としての自覚身につけてもらわないと。そうだ。うん、明日九時からのなんだっけ？ ああ、ミーティング。みんなに絶対遅刻しないように。この頃ちよつとたるんでるから。はい、じゃあ、よろしく。お疲れさま。

健人、携帯を切る。

健人 なかなかまかせられなくて、すぐ電話かかってくるんだもん。
亮平 相変わらず、人に厳しく、自分にあまいね。
健人 仕事は仕事。そのへんはね。
亮平 社長なんでもね。なんだか信じられない。
健人 ちっちゃい会社だつて。
亮平 でも、いいところに目付けたよね、ゲイばかり集めて人材派遣会社つて。
健人 ばつかりじゃないつて、他よりはちよつと多いくらい。ま、みんなカミングアウトしてるけどね。それだつて、結局そうなたただけだつて。
亮平 そんなことできてるなんて信じられないね。
健人 うん。僕も。でも、札幌だからかなつて気もするね。ほら、パレード、毎年やつてるからね、ゲイが生きやすい町になつてるかもしれない。一昨年、市長がさいつしに来るんだから。ほんと感動するよ。
亮平 変わったもんだよね。昔はあんなふうが大勢で歩くなつてありえなかつた。
健人 昔つて言わない。たかだか十年かそこいらのことでしょ？
亮平 そんなこと言つたら、僕らが会つたのは大昔つてことになる。
健人 だから、いやなのさ。じゃあ、僕、先輩のとこ寄つて、それからまた来るね。
亮平 どうなの、具合？
健人 だいじよぶ、だいじよぶ。ちよつと風邪引いてるみたい。一緒にご飯食べてくるから。
亮平 おだいじにつて伝えて。
健人 うん。じゃ、あんたも出かけないと。
亮平 うん。
健人 わかつてる？ 待ち合わせ場所、雪印パーラー。わかるよね？ ちゃんと遅れないでいくんだよ。
亮平 あ、それなんだけど。
健人 なに？
亮平 やつぱりやめようと思うんだ。
健人 こら、一度は行くつて決めたんでしょ。何をいまさら。拓也くんだつて楽しみにしてるでしょよ。
亮平 いや、わからない。きつと、うらみごといっばい言われるんだ。
健人 どうしてよ？ 札幌に来たときは寄つてみればつて、優子さんに言われたんでしょ？ ただ会つてみればいいじゃない。
亮平 どんな顔して会えばいいんだ。離婚してから十年、一度も会つてない。結婚してこつちに転勤してきて、子供も生まれた。僕はもうおじいちゃんになつてるのに、一度も話してないんだ。毎年、十一月に来てるつていうのに。
健人 しょうがないじゃない、あんた、研究がいそがしくなつたんだから。年がら年中学会で全国飛び回つて。わかつてくれると思うよ。そのくらい。
亮平 そんなの言い訳だ。

健人 言い訳だつてわかってるんなら、ちゃんと正直な気持ちを話さないよ。
亮平 ……。

健人 会いたいんでしょ？ だったら、会うべきだつて。どうせ、ずっと会ってなかったんなら、これがかきつけかけで、もめたとしても、何もなくさない。もし、仲良くなれたら、ばんばんざいじゃない。

亮平 そうなんだけど……。

健人 ああ、めんどくさい。

亮平 いいよ、先輩のときいつて。

健人 だめ、あんた逃げ出しそうだから。見送ってから出かける。

問

亮平 そうだ。一緒に来てくれないかな？

健人 は？

亮平 そうだよ、一緒に会ってくればいい。そうだ、そうだよ。

健人 何言つてんの？ 拓也くんは、あんたの息子でしょ。私は関係ない。

亮平 そんなことない。昔、カミングアウトに無理矢理付き合わされたじゃないか。あのときのお返しだと思つて。

健人 あんた、あのとき、寿司どれだけ食べたか覚えてないの？ ずっと言われてるんだからね。なんて紹介するの？ むずかしいでしょ？

亮平 そうか……

健人 友達、恋人、愛人？

亮平 リンゴくれた札幌のおじさん。

健人 リンゴ？

亮平 覚えてないの、ほら、拓也小学生で算数わからなくて、リンゴで数えようとしてたとき、おみやげだつていつて、やまほど買つてもたせてくれた。

健人 そんなこともあつたつけね。

亮平 あいつ、あのリンゴから算数が苦手じゃなくなったんだよ。そうだよ。恩人だ。

健人 覚えてないつて。

亮平 いや、覚えてる。僕が、一緒にいたころの拓也は覚えてたんだから。

健人 ……。

亮平 よし、じゃあ、行こう。

健人 ちよつと待つて、急にそんなこと言われても。

亮平 何？

健人 着替えねば！

亮平 いいよ、そのままだ。

健人 いやだ。そんなの。どうしよう、なんだかドキドキする。わかつた。ちよつと待つて、作戦をねつてから出かけましょう。

亮平 何、作戦って？

健人 決まってるでしょ、私の登場のしかたよ。

亮平 だから、普通でいいって。

健人 いいから、相談。ちよつと座って、お茶でも飲みましょう。

健人、机の上に置かれたカップをとろうとする。

健人 ねえ、何これ？

亮平 どうしたの？

健人 カップが二つになってる。どういうこと？

亮平 母さんが、気を利かして、おいておいてくれたんじゃない？

健人 気を利かすなら、とつくに利かしてるはずでしょ？ やだ、ぼけたんでないの？

亮平 でも、二つあったほうが助かる、僕ももらおうかな。

健人、二人分のお茶を入れる。

二人、お茶を飲む。

健人 (つぶやく) 一緒に登場するか？ それとも、後から行くか？

亮平 初めて会った頃の母さんの年、僕ら追い越してしまったね。

健人 ……うちの母さんも。なんかショック。

亮平 でも、この部屋は変わらない。

健人 相変わらず古くさくて。

亮平 ううん、若々しい気がする。今年も来年も、ここには、十代の受験生が座るんだ。

未来を夢見ながら。この部屋にいて落ち着くのは、そんな若さが感じられるからじゃないかな？

健人 好きね若い子。

亮平 まあね。初めて会ったときは学生服だったんだよね。

健人 そう、あんた酔っぱらって、ゲロ吐いて。

亮平 思うんだよ。あのときあんなに酔っぱらわなかったら、出会ってなかったんだって。

健人 そう。ラーメンだけでやめておいたら、こんなに長いつきあいも始まってなかったんだね。

亮平 前の日に先輩にふられてなかったら、あんなことにはならなかった。

健人 そうかもしれないね。なんだかなあ……

亮平 何？

健人 こんなに長く続いているのって、きっと運命的な出会いだったんだわ、なんて思ってたけど、そうじゃないんだ。

亮平 うん。そんな運命なんて信じない。

健人 お、さすが数学者。

亮平 僕が信じるのは、運だけだ。なんて僕は運がいいんだろうって、そう思ってるんだ。

健人 そう？

亮平 ま、そこそこかな？

健人 で、どうする？ 一緒に行く？ あ、でも、どうしよう。露骨に嫌われたら。

亮平 だから、僕もそれを言ってるんだって。ほんとに、人に厳しく自分に甘いんだから。

問

健人 そうだ、電話してよ。電話して、僕が一緒に行くって言って。

亮平 え？

健人 そうよ、携帯の番号くらいは知ってるでしょ？ いくら会ってなかったって。

亮平 それはまあ。

健人 ねえ、じゃあ、今かけよう。

亮平 でも……

健人 電話できない人が、どうして会えるの？

亮平 またむちゃくちゃな理屈を。

健人 いいから、ほれ。

亮平 まだ仕事中だよ。

健人 出なかつたら、留守電にメッセージ。

亮平 わかつたよ、かければいいんですよ。まったくもう。

亮平、携帯のボタンを押して、耳に当てる。

健人、お茶のカップを手にしたまま、亮平を見ている。

健人 ねえ、後悔してない？ 出会ってしまったこと。

亮平 全然。

拓也が電話に出たらしい。

亮平、ためらいながら、なんとか話し始めようとする。

幕

劇団フライングステージ第43回公演

ドラマリーディング「二人でお茶を」TEA FOR TWO」

二〇一七年十一月九日・十二日

下北沢 OFF・OFFシアター

作・演出 関根信一

出演

西野亮平 …… 阪上善樹(九日)

宮内健人 …… 石坂純(十二日)

ト書き …… 関根信一

…… 石関準